

Title	退職記念号の刊行にあたって
Author(s)	岩井, 康雄
Citation	日本語・日本文化. 2013, 40, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50762
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

退職記念号の刊行にあたって

本センターでは、今春、角道正佳教授・山蔭昭子教授・山本進教授の、三名の先生方とお別れすることになる。三先生に一度に去られることは、寂しさがそれだけ増すというにとどまらず、我々の職場にとっても、こういう言い方が適切かどうか分からないが、大きな痛手である。

毛利家の家訓を体現するものとして、「三本の矢」として知られる逸話が伝わっている。一本では簡単に折れる矢も三本集まれば容易には折れない、というその逸話は、しかし、それをいま我々の職場に当てはめるとき、いかにも心細さを感じさせるものと言わざるを得ない。何となれば、我々はこの春まさにその三本の矢を失うことになるとも言えるのだから。

三先生の、本センターへのこれまでの貢献と業績とは、ここに挙げるまでもないことであろうが、ご退職にあたり、ごく簡単にその概要を記しておくことにしたい。

角道教授の業績は、モンゴル系言語についての研究をその中心とされるが、単著『土族語互助方言の研究』に集大成されるように、モンゴル系言語の中でも特別な位置を占め、分けてもモンゴル語史の研究には重要な意味を持つ土族語の研究が最も特筆すべきものである。また土族語が消滅危機言語となっている現在、2012年に上梓された『土族語語彙集』の持つ価値は計り知れないものと言える。個人の研究だけでなく、後進の育成や学会全体の交流にも力を尽くされ、多くの学外の学会で幅広く活躍してこられた。特に日本モンゴル学会においては、常任委員を務められるなど、中心的な役割を果たして来られた。学内においても、副センター長に就任し本センターの管理・運営に力を注がれたほか、教育面においては、通常の授業・発表会などあらゆる場面で、学生の育成にひとときわ熱心に取り組まれたことは、多くの教員たちの範とするところであった。

山蔭教授は、ラテンアメリカの文学を中心に研究を進める傍ら、本センターの運営にも多大な尽力をなされてきた。特に平成18年4月にはセンター長に就任

され、2年間センターの運営の中心的役割を担われた。そのセンター長在任中、大阪大学と大阪外国語大学の統合がなされたが、その過程におけるご貢献は計り知れないものと言わなければならない。また、学外においても、日本ラテンアメリカ学会において西日本研究会担当委員を務めるなど、学会運営にも積極的に活躍してこられた。

山本教授は、留学生への日本語教育という世界に関わっていった初めての世代の方であり、留学生にとっても、我々教員にとっても、精神的な支柱とも言うべき存在であられた。同教授に接して薫陶を受けた多数の元留学生が、現在では世界の各地で要職に就き、日本と母国との架け橋となって世界中で活躍している。さらに、学外において、長年にわたって地域のボランティア活動に力を注いでこられたことは特筆すべきことである。こういったことは大学内ではあまり評価されないきらいがあるが、増加しつつある外国人との共生が問題とされるようになった現在の日本社会においては、実はきわめて重要な活動である。具体的には、異文化コミュニケーションや日本語を教えるための大小さまざまな講習会・座談会を公民館等で開催し、これまでに得た知見を地域住民に惜しみなく伝える活動を行ってこられたのである。そのことは、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとする大阪大学の、大げさではなく象徴とさえ言えるのである。

以上、はなはだ簡単ながら、三先生の教育と研究について記した。先生方に去られることは、本センターが大きな支えを失うことを意味する。残される我々としては、肅然と襟を正して全員が研究と教育とを進めて行くほかない。再び冒頭の三本の矢の逸話になぞらえて言うならば、全員が結束したひと束の矢となるよりほかないのである。因みに言えば、元就の伝えた教えを守ったかは知らず、毛利家は幕末優秀な志士たちを輩出した長州藩の藩主として、維新の原動力ともなった。その響みに倣うわけではないが、本号を記念号として専任教員の論文を纏め、退職される先生方への餞とする次第である。

平成二十五年二月十一日

日本語日本文化教育センター長 岩井康雄